

演題名：40歳代で初めて不妊治療開始した患者に対する看護介入のキーポイント

氏名：宮喜由紀子¹⁾ (ミヤキ ユキコ) (会員番号：5512) 小松原千暁¹⁾ 福田愛作¹⁾ 森本義晴²⁾

1) IVF 大阪クリニック 2) HORAC グランフロント大阪クリニック

所属：IVF 大阪クリニック (アイブイエフオオサカクリニック)

【発表要旨】

【目的】

当院では生殖医療相談士5名で「ナース相談室」を開設している。40歳代で初めて不妊治療を始め一般治療が長期化したため心身ともに疲弊した患者の相談を受けることがあった。この症例を契機に、治療歴のない40歳代初診患者の治療経過を検証することにより、高齢初治療患者が納得した治療プロセスを辿れる看護介入の在り方について検討した。

【方法】

2020年1月から12月の初診患者総数734名であり初診時40歳以上で治療歴のない患者は82名、その中で治療を開始した58名の患者を対象に1年間の治療内容と体外受精までのステップアップの期間を後方視的に検討した。

【結果】

治療を開始した58名の中で、5名(8.6%)が一般不妊治療で1年以内に妊娠卒業し、1年以上一般不妊治療を継続していた患者は24名(40.6%)。一方、一般不妊治療後1年以内に体外受精に移行した患者は14名(23%)、体外受精までの移行期間は平均6か月であり、そのうち2名(3%)は妊娠卒業し、12名は治療を継続中であつた。一般治療を経ず直接体外受精に進んだ患者は20名(33.8%)、そのうち3名(5%)は1年以内に妊娠卒業し、12名は治療継続中、5名は治療を終結していた。

【考察】

初診後早期に体外受精に移行した患者がいる中で1年以上一般不妊治療を継続している患者もいる。今回の検証より40代の妊娠率と治療方法を考慮すると、不妊治療開始時点もしくは開始後の早い段階で先を見据えた情報提供の必要性が明らかとなった。40歳代の患者にとっては苦痛を伴う情報を含め、患者と出来る限り早期に情報を共有するシェアードディシジョンメイキングを実践することが、患者が納得して、また後悔をしない治療を進められる支援の重要性を痛感した。今回の検証に基づいて、女性の年齢と妊孕性を含めて記載した冊子を作成し初診時に配布することとした。この冊子の有効性の評価を今後の課題としたい。